

穴太廃寺など古代の寺院跡は、県内で100カ所近くが知られています。これらの寺院跡を調査するのに重要な手掛かりとなる遺物が瓦です。

先進文化として、仏教は仏像や経典のみならず高度な土木・建築技術を伴って日本に入ってきました。屋根を初めて瓦で葺いた建物は寺院だったのです。よって、古代寺院とされる所からは必ず大量の瓦が出土します。総じて厚く、たたき目や布を押し当てた跡が残り、軒先に用いる場所にはレンゲの模様などが美しく押された瓦です。

その後、仏教は人々の信仰を集め、中世には隆盛を極めていくのですが、発掘調査で中世寺院を見つけることはほとんど困難になります。寺院がなくなつたわけではなく、巨大な礎石を配置し瓦を大量に出土する遺構が見当たらないのです。先進技術として入ってきた瓦葺建物は、古代では

宮殿など官衙施設にまで及び、盛んに建てられました。が、平安時代以降、その技術が衰退したかのように姿を消していくのです。

中世に隆盛を誇った湖東三山の寺院や中世の大寺院敏満寺も、瓦が葺かれることはありませんでした。どうも、中世の寺院は「けら葺か松皮葺、多くは草葺の建物だったようです。瓦を使わなくなつたことで、重い重量を支える必要もなくなり、巨大な礎石も見られなくなります。基礎は脆弱なものとなり、他の建物との区別が困難となり発掘調査で見つけ出すことを難しくしているのです。

そんな中世の村のお寺の様子を伝える資料が、第35回、36回にご紹介したように、長

巡礼者の宿



鈴鹿郡上田より

三所順礼聖同行四人

鴨田遺跡出土の巡礼札

同行した人数を書いた巡礼札

浜市の鴨田遺跡から出土しています。今の市立長浜病院の近くです。室町時代の溝から50点余りの巡礼札が出土したのです。日本で最も古い巡礼である西国三十三所巡礼のもので、宝徳4(1452)年の年号が書かれています。30番札所である竹生島宝蔵寺に向かう途中この村のお堂に立ち寄り参拝し、そして一息ついたか、もしくは宿泊をして、そのお札に巡礼札を納めていったのでしょう。

紀になってからのようです。たしかに、札には巡礼者の出身地が書かれた後には、三十三所巡礼をしているものが僧や聖であると書かれています。俗と書かれたものは一例しかなく、まだ巡礼者のほとんどがプロの宗教者だった様子ばかりです。そして、同行三人とか一人とか記しています。私が四国八十八所を巡ったときにかぶった遍路笠には「同行二人」と書かれました。説明では「弘法大師様がいつもおそばにおられるから同行二人なんですよ」と説明を受けました。ところが出土した巡礼札

では本当に同行した人数を書き示しています。このようなありがたくもしゃれた書きようは一般民衆が多く巡礼するようになり、信仰心を高める名言として使われ始めたのでしょう。

鴨田遺跡の発掘調査では、寺院そのものの遺構は検出されませんでした。瓦も全く出土していません。巡礼札と銅製の花瓶と燭台が出土したと、そして「堂」という地名が残っていることが、寺院が存在したことを示しているだけですが。室町時代、苦難に満ちていたことが想像される巡礼者を受け入れていたのは村の小さなお堂であり、そしてそのお堂はきつと、草葺の小さな建物だったのでしよう。

村の小さな寺院で受け入れ

(財団法人滋賀県文化財保護協会 横田洋三)